立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ119

ドイツ語対話に表れる思考の型と“politeness”*

Argumentation und “politeness” in deutschen Dialogen

宮 内 敬 太 郎
MIYAUCHI, Keitaro

<Abstract>

In diesem Beitrag geht es um Erforschung von Denkmuster, darunter vor allem Argumentation, und “linguistic politeness” im Deutschen. Als linguistische Daten werden dabei Informationsgespräche herangezogen.

In Bezug auf Argumentation konnte durch die Analyse “deductive pattern” festgestellt werden. Im Rahmen von “politeness” wurden mehrfach “turn-taking” -Regelverstöße seitens des japanischen Interviewers registriert, was wohl in der deutschsprachigen Gesellschaft als “unhöfliches” Verhalten zu klassifizieren wäre. Weiterhin hat sich ergeben, dass Interviewte eine sogenannte “negative politeness”-Strategie anwendeten, indem sie eine Frage des Interviewers eigens mehrmals umformulierten. Im Bereich “nonvervbalen” Verhaltens konnten bestimmte Mimik und Gestik, die z. B. Nachdenken oder Scheuklappendenken ausdrücken, identifiziert werden, die semantische Funktionen genauso wie die sprachlichen Zeichen signalisieren.

0．序　論

種々の言語共同体で営まれる「対話」(Dialog) には各社会で優勢な文化を反映した言語慣用や慣例化された行動様式が顕著に表れるものと想定できる。これらは具体的には、依頼や自己主張を行う際、要件もしくは結論を先に言うか、あるいは理由づけを先に行うかといった思考の進め方（思考様式)、また意思疎通を円滑に行うための「丁寧な言葉使い」(“linguistic politeness”) の様式等が挙げられる。この他、私的あるいは公的な会合などで誰が先に口火を切るかという「発言権」の順位、「話者交替」(“turn-taking”) の原則、「聞き手のシグナル」(“Hörersignale”: Bergmann 1994: 13, Schwitalla 1979: 92f.) の発信、「発話重複」(“overlap”: Shegloff 1987: 80, Sacks, Shegloff and Jefferson 1978: 16f.) の対処等に代表される「社会的仕組み」(“social

＊本稿は2004年10月3日に日本独文学会第3回国際会議・秋季研究発表会で口頭発表を行った草稿を大幅に増補改定して作成された。本研究プロジェクトは2004年度科学研究費補助の助成を受けて推進されている。本稿で分析の対象に選定された言語資料は2003年度立教大学研究奨励助成金の援助を受けて収集された。ここに謝意を表明する次第である。

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ120

organization”：Lee, J. R. E. 1987: 26, Scollon/Scollon 1997:137, “social content” : Heritage 1998: 4参照）等の要素が密接に関連していると考えられる。

これらは何れの社会でも複合的に関連し合い、一つの体系性を形成して、人間関係を円滑かつ効率的に維持・発展させ、社会秩序を維持する重要な機能を果たしていると推定できる。ただこれら「思考様式」や「丁寧な言葉使い」など種々の要素とこれらに密接に関わる「話者交替」等に代表される「社会的仕組み」がどのような形で表れ、その重要性にはいかなる優劣関係が認められるかは各社会により異なると推論できる。

本稿ではドイツ語母語話者の対面相互行為（vis-à-vis Interaktion）の一形態と位置づけられるインタビューを言語資料にして、その中で展開される思考の型とこれと密接に関連すると思われる “politeness”、さらに「社会的仕組み」の中の「話者交替」、「発話の重複」等に焦点を絞り、ノンヴァーバル行動をも視野に納めて、それらの社会的機能と意味合いについて異文化コミュニケーションの視座から特定と解明を行いつつ、実証的な分析・記述を行う。

1．対面相互行為に表れる文化の諸相

1. 1. 論　証

いずれの社会でも優勢な文化を反映した価値観を基盤にして伝統的に形成された思考様式が継承され、その中で意思疎通が営まれていると想定できる。いまこの枠組みの中で意見表明や自己主張の仕方に焦点を絞ってみた場合、社会によって特定の様式が優勢に機能していると考えられる。なお思考の型に関わる先行研究では2種類のパターンが報告されている。第一の様式は、最初に要件もしくは結論を切り出し、その後で根拠付け、論証を行う型である。これは北部アメリカやドイツなど西ヨーロッパの国々で一般的な形式とされる（Scollon/Scollon 1992: 74ff., Hinds 1990: メイナード1997: 76f. 参照）。第二の型は、最初に根拠や論拠、あるいはその周辺の事情を説明して、最後に要件を伝えるパターンである。これが一般的に該当するのは中国やタイ、韓国、日本などの社会の構成員であるとされる（Scollon/Scollon 1992: 74ff., Hinds 1990: メイナード1997: 76f. 参照）。

ただ日本社会で優勢な思考様式が、中国や韓国と同じ第二の型と見なすのが妥当かについてはさらに研究を深める必要があると考える。

これとは異なる論証様式に関する先行研究では、論文などの書き言葉を研究資料にして「レトリック構成法」という枠組みから「演繹的（“deductive”）」「帰納的（“inductive”）」「準帰納的（“quasi-inductive”）」という類型化が提示されている（Hinds 1990）。これによるとヨーロッパ、タイ、中国、韓国、日本など東南アジアの社会の構成員には思考様式の差異が認められると言う。なおここで「演繹的」とはまず論旨を述べ、その後にその根拠づけを行い、結論を述べる思考様式を指す。次に「帰納的」とは論旨や結論を文章の最後に述べる様式を意味する。また「準帰納的」は、論旨に相当する結論は最後に述べるが、この結論は前に展開した論理の

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ121

方向と必ずしも密接な関連性がないという特性を示す。Hindsは英語母語話者には通常「演繹的」様式が一般的に浸透していると見なし、日本語母語話者はこれらどちらのパターンにも属さず、「準帰納的」という別の範疇に分類する見解に立つ（Hinds do.: 76f. 参照）。

これと類似した結果として、日本語話者、米語話者の作成した作文をサンプルとして分析したデータから抽出した研究報告がある(Kobayashi 1984)。これによるとアメリカの学生は一般論や論点を冒頭にまとめ、その後より具体的かつ詳細な説明に進む傾向が認められると言う。ところが日本人学生はその逆で、細かい点を説明した後で、まとめ・論点を後から述べるという結果が出されている（Kobayashi 1984: 737f. メイナード 199: 76f. 参照）。

この点確かに「準帰納的」様式が優勢とされる日本語母語話者の場合、特に日常の言語行動において最後に要件を明確に言語表現することは顕著に見られず、むしろ暗示するに留めるといった話し方が一般的と言える（宮内 1999:15-18参照）。しかしドイツ語母語話者の一般的な思考の進め方を考えた場合、アメリカなどと同様の「演繹的パターン」が優勢を占めると捉えるのは妥当であると考える。

なおここで特定の思考様式と言う場合、一つの社会でどちらの型がより一般的に用いられるかという性質の問題と理解すべきである。換言すれば一社会でかかる一つの様式のみが一律に浸透していると主張するのではなく、どの社会でもこれらの様式が普遍的に見られ、どの様式がより頻繁に使い分けられるかということを示唆するに過ぎない。

1. 2. “linguistic politeness”, “face” と「論証」

“linguistic politeness” は恐らくどの社会でも相互行為を円滑かつ効率的に遂行する上で重要な役割を果たしている考えられる。この概念については種々の定義がなされている（Lakoff 1989: 102, Fraser and Nolen 1981: 96, Brown, P. 1987: 114, Ide et al. 1992参照）。いまこれらの定義を比較、検討すると “politeness” とは、各言語共同体で共有される社会規範を軸とした「丁寧な言葉使いの全て」が核となる意味として抽出できる。この点を踏まえて本稿では「ポライトネス」を「円滑なコミュニケーションを遂行するために話し手が相手に示す心配りを表出する言語使用のストラテジー」（井出1995：山口1995：76参照）という規定を援用する。ちなみにドイツ語では “politeness” という名詞はHöflichkeitと訳され、この形容詞としてはhöflichが当てられている（Dern 2003: 127参照）。

ところで「ポライトネス」の概念には「社会規範の視点」「会話の公理の視点」「“face” を立てる視点」、これに「会話上の取り決めの視点」の4つの主要な側面が包含される（Fraser 1990: 221参照）。この内「“face” を立てる」という視点はBrown & Levinson（1978, ’87）らによって提起された。なお “face” は「名誉」「徳」「恥」「贖い」といった基本的な文化的コンセプトを包含する「面子」または「体面」に置き換えられる（Brown & Levinson 1978: 14参照）。ちなみに本稿で「文化」とは、人間の「メンタル・プログラム」（ホーフステード 1991: 5）に例えられる機能を果たし、歴史的に取捨選択された「一つの社会または地域共同体で共有される生活に密

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ122

着した知識の総合的体系」(Goodenough 1964 参照) という意味で用いる。

Brown & Levinsonの “face” の中心的概念は2種類の特別な欲求で構成される。一つは “negative face” (「消極的面子」) で、「社会の各成人が抱く、行動の自由を他者に侵されたくない欲求」(Brown & Levinson 1987: 62, Brown /Levinson 1978/87: 101-123, Watts, Ide and Ehlich 1992: 7参照) から成り立つ「相手の消極的面子を保障する行為」を指す (Watts, Ide and Ehlich 1992: 7参照)。もう一つは “positive face” (「積極的面子」) で、これは「自己の行動や価値観に関して他者から共感されたいという積極的な欲求」(Brown & Levinson 1987: 62) を中核にして成り立つ。これを基盤にして、相互行為の相手の「積極的面子」に配慮するストラテジーとして “positive politeness” を立て、また「消極的面子」 を満足させるストラテジーに “negative politeness” という概念を設定している。この枠組みでBrown & Levinson は「negative politenessのストラテジーは「面子」を傷つける恐れのあるFTA (“face-threatening-act”) を最小限に抑制する機能があり、ヨーロッパの文化でポライトネスといった場合、すぐ念頭に浮かぶのはnegative politenessのストラテジーである」という見解を示している (Brown & Levinson 1978/87: 129f. 参照)。

いまドイツ語で “politeness” に関わる言語手段として一例を挙げればgern、Ihrer Meinung nach、Könnten Sie… ? のような特定の副詞 (句) や接続法Ⅱ式を用いた表現がよく用いられる。特にインタビューなどでは会見記者 (IR) によって次のような丁寧な言い方がよく使われる。

Wir dürfen …+ (begrüßen, fragenのような遂行的動詞)

Könnten Sie bitte (vielleicht)…+(sagenのような「言う」を意味する動詞)

命令形 (の文)+(mal, doch, vielleichtのような様態詞) (Schwitalla 1979: 224f. 参照)

ただ「丁寧な言葉使い」はこれら特定の語句や構文に限定されず、対話が行われる社会的な「場」に応じて意味論的、語用論的にこの意味機能を持つ言語手段が他にも広範囲に生成される点は留意すべきである。

ところでBrown & Levinsonはコミュニケーションを行うこと自体「面子」を満足させる側面と、これを脅かすFTAの要素を孕んでいるという見解を示している (Brown & Levinson 1978: 13参照)。この点Goffmanも「出会いは全て “face engagement”」(Goffman 1964: 6) であるという視点に立つ。確かに現実的に相互行為で相手を説得する論証行動に出た場合、これにより相手に対してFTAを引き起こし、「丁寧さ」を損ねるか、その度合いを下げる要素が抱き合わせで存在すると言える。ただし「面子」がいかなる行為によって潰されたか、そしてまたそう感じる度合いは、例えばドイツ語母語話者と日本母語話者では異なるものと推論できる。その根拠として両社会を比較した場合、自分の考えを余すところなく言語記号化して相手を納得させて意思疎通を図る意識が共有されている社会と、これをやるとむしろ敬遠される社会の相違が認められるなど、それぞれ規範的な行動様式、価値観が定着していると見なせる現実が在ると想定できるからである (ホーフステード 1995: 58参照)。

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ123

1. 3. インタビューと「社会的仕組み」

対話は予め「計画された談話」と「計画されない談話」(Ochs 1979a: メイナード、S. K. 1998: 90 参照）に大別できる。本論では予め「計画されない」自然な対話を研究の対象に据える。ここで「対話」(Dialog）とは「少なくとも2人以上が相互行為に組み込まれて、特定の話題に焦点を合わせ、言語記号を用いて少なくとも1回は話者と聞き手の役割が交換される」コミュニケーション行為と規定しておく（Schwitalla 1979: 37f. 参照)。なお談話分析ではconversation, Dialog, Gespräch, discoursなど、英語、ドイツ語、フランス語からきている用語と、これに対応する訳語「対話」「会話」「談話」「ディスクール」「ディスクルス」などが混在する形で用いられている。本論ではこれらドイツ語や英語、フランス語から採り入れられた語の厳密な概念規定には立ち入らずに、ほぼ同義の概念を表す用語という了解で使用する。

なおインタビューを分析の資料に選んだ理由は次の点にある。まず対面相互行為としての対話は、種々の社会的状況の中で営まれる「自然な言語使用の原型」(Levinson 1983: ザトラウスキー 1993: 5参照）に近い形と規定できる。そしてこの対話の一形態と位置づけられインタビューは「口頭による自然なコミュニケーションに近い」(Vgl. Zydek-Bednarczuk 1998: 291）対面相互行為と見なせる。すなわちインタビューをはじめとする対面相互行為は、概ね「話者は談話を始める時点では、何を述べるかは自ら漠然としか分かっていない」(Schwitalla 1979: 22）という特性が一般的に認められる。したがってインタビューには自然な形の言語運用という性格が明瞭に現れ、この相互行為には各言語共同体の言語慣用をはじめ慣例化された「社会的仕組み」が顕著に現れるものと予測できる。

インタビューはテレビなどのメディヤにより、広く公表することを目的にした1）政治家、2）特定の学術分野を代表する専門家、3）芸能・スポーツ選手を対象にした「対話」の3種類に分類できる（Schwitalla 1979: 182)。このうち本論で対象にするのは２）の「専門家を対象にした」学術的調査を目的にしたインタビューに分類できる。ただしこれらインタビューは当初からテレビや新聞などマス・メディヤで公表を計画したものではない。

さて会話の全体的構造は大枠としてa. 開始部、b. 第一話題のスロット、c. 話題の連鎖、d. 終了部の4つの部分から成り立つ（ザトラウスキー 1993: 20参照)。これらの構造的枠組みはインタビューにも該当すると考えられる。この前提のもとでインタビューに共通する点は「インタビュアー（IR）は会見を開始する。そして種々の質問をする。その際何をテーマにするか会見の進め方はIRが専ら取り仕切る。会見の終結はIRが行う」(Schwitalla 1979: 325）という専有の権限が認められる。ただ質問の内容に関してはIRの専権事項と言えるが、しかし現実的には「IE（被会見者）は常にIRが期待する回答を表明するとは限らない。IEは質問から逸れる回答をする場合もあるし、質問の受け入れを拒否したり、質問の公正さに苦言を呈する場合もある。さらにIEがテーマ、会見の進め方の両面を遮断して、独自に重点を持ち出した質問に回答する」インタビューに発展する事例も存在することが報告されている（Schwitalla 1979: 325-327参照)。

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ124

1. 3. 1.「話者交替」(“turn-taking”)

「話者交替」は「発言の順番の交替」(“turn“) である。この「ターン」は文・節・句など統語上の単位、イントネーション、トーン、ピッチのような韻律上の要素など様々な単位の節目で実行され、会話の関与者によって相互に編成されていく。換言すれば、これら単位の終了部が原則的に話者の変わる可能性がある箇所であり、こうした箇所は「話者交替適格箇所」(TRP: transaction relevance place) と呼ばれる。英語母語話者に関してはこのTRPを目安に話者交替の「ルール」が編成されている (Sacks, Schegloff & Jefferson 1978, Levinson 1983: 298、ザトラウスキー 1993: 11f. 参照)。ちなみに「話者交替」を実際に実現させるのはターンの終わりを予測する「予測可能性」(ザトラウスキー 1993: 12 参照) が重要な役割を果たす。すなわちこの要素の会得が非母語話者にとって円滑な対話を行う重要な鍵になるわけである。その際、留意すべき点は先行する発話者および他の参加者に対して、これらの規範を守らなかった場合、「ポライトでない、もしくは少なくとも発話の妨害をした」(Schwitalla 1997: 76) と見なされ、その結果、社会的「制裁」(“sanction” Heritage 1998: 3) を受ける可能性が生じることである。

ドイツ語の話者交替の実際的な仕組みについては Schwitallaが具体的なケースに分けている。それによると、まず言語手段を用いたターンを譲る基本的な指標として：1) “Herr NN + bitte”、2) 主導的発話を終わらせる、が提示されている。非言語手段による指標は：1) 手で発話を促す動作、2) アイコンタクト、が挙げられている。逆に割り込みを防ぐ言語手段として、割り込まれる危険性がある場合は、“Darf ich zu Ende reden” のように明確に阻止するか、あるいは発話の特定の部分を繰り返す、または接続詞で始まる新たな統語単位を発話する等の行動を起こす。他方で準言語的な指標としては、聞き手が同時に話し始めた場合など、話す声を強めたり、音調を上げるという行動に出る。さらに非言語的手段としては、中断される急な危険性がない場合は、顔と両手はゆったりさせておく、あるいは視線を相手から反らす。しかし割り込まれそうな場合は、両手を広げて防ぐサインを送る動作を示し、対話の相手から視線をそらして顔を横に向ける動作を行う (Schwitalla 1979: 82〜84参照)。

話者交替のルールに関連してドイツ語母語話者に共有されている4種類の「聞き手のシグナル」が挙げられている。これらのフィードバックは発話交替を促す指標を意味しない。というのはこれらの「シグナル」には1) 話を聞いている、理解していることを伝える “mhm”, “ja” と頷く反応、2) 話題、内容に通じていることを伝える慣用句 “ich weiß”, “ach ja”、3) 話者の意見・表現に同意する気持ちを伝える慣用句 “genau”, “stimmt”, richtig”、4) 聞き手として発話内容に態度を表明する “das glaube ich” 等の機能があると認識されているからである (Bergmann 1994: 13, Schwitalla 1979: 92f. 参照)。

ドイツやフランス、北米では政治的討論や学会での討議のような対話ではTRPに付随する特定のサインや仕組みに従い、事柄に即して発言権を獲得したり、割り込む行動が一般的に許容されている。しかし中国語やハングル、日本語などの言語共同体では「話者の年齢、社会的地

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ125

位あるいは年長者が優先される（Alber1964; Duranti 1994. Vgl. Heritage 1998: 7）」といった発話交替の仕組みがこれと異質な原理になっており、その結果これら母語話者がヨーロッパの社会で英語やドイツ語などを用いて相互行為を遂行する際、「丁寧な言葉使い」「面子」などの点で円滑な意思疎通を図る障壁要因になる可能性がある。

1. 3. 2.「発話重複」

現在の話者を含めた2人（以上）の同時的な発話の重複は「話者交替」の仕組みと直接的に関係してくる。この現象は特に討議などの場では往々にして発生する。発話重複は「意図せずに起こる」場合と、故意に割り込もうとする「妨害的中断」に大別できる。ザトラウスキーは、この両者は上で言及した「話者交替」のルールから区別ができるという見解を示している（Sachs, Schegloff and Jefferson 1978: 16f., Levinson 1983: 299, ザトラウスキー1993: 12f. 参照）。

2．言語理論

対話分析を手がける言語理論は「談話分析」（“discourse analysis”=DA）と「会話分析」（“conversation analysis”=CA）の二つに大別できる。前者のDAは「生成文法の成果をテクストに応用する分析方法」であり、「発話行為論」（speech act）を援用した方法論と言える。ここでは第一に会話構造の規則性や発話の「適格性の条件（well-formed formula）」を抽出することに主眼を置く。そして分析は「内省に基づく」言語資料を作り出して「演繹的」に進める手法を取る。他方CAは社会の構成員が社会的環境をどんな手段を使って解釈し、行動しているかを記述することを研究目標に据えてる。ここで重視される方法論は、社会で実際に営まれる相互作用で実際に生起した言語行為を資料にして会話の組み立て方を「経験的・帰納的」に分析するアプローチから成り立つ（Levinson 1983: 286f.: 安井・奥田訳 1990、ザトラウスキー1993: 5f. 参照）。

本研究では “Genfer Modell”（=“Genfer Schule”）の名のもとに1984年頃から主にフランス語の談話研究のために構築された言語理論を援用する。この「ジュネーブ・モデル」はこれらDAとCAの両パラダイムを基盤に据え、さらに理論的支柱にE. Goffmanの相互行為理論、J. L. AustinとJ. R. Searleの語用論およびO. Ducrotの論証哲学を取り入れている（Moeschler 1994: 69ff. 参照）。ただ言語資料の選定はDAとは異なり、あくまで社会で実際に営まれる自然な相互行為を対象にして、帰納的方法論に基づく分析を重視する。本稿でこの言語理論を援用するのは、「論証様式」や「丁寧な言葉使い」等に関する分析が単に統語論的基準からだけでなく、意味論的、語用論的視点から射程に収めることが出来ると考えられるからである。

「ジュネーブ・モデル」は談話では参加者各自が自由に発話を企画できるのではなく、「会話の線的特性」に基づく「会話義務」「結束性義務」に拘束された「プログラミング」の原理に主導されて生成されるという着想に基づき構築されている。その際一つの会話はそれぞれ階位

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ126

の異なる発話の集合体で構成される階層構造を成すという仮説に立ち、発話を以下の5種類の単位に分類する。1)「段落」(I<Inkursion):2人以上の話者の相互行為から成り立つ最大の単位。2)「節」(T<Transaktion):同質の話題から成り立つ一まとまりの発話単位。3)「発話交換」(GA<Gesprächsaustausch、仏語E<échange):会話の最小単位。2人(以上)の話者によるGesprächszugの交換で構成される。4)「発話列」(GZ<Gesprächszug、仏語I<intervention):上のGAの構成素になる単位で、一発話者の発話の最大の分節を指す。5)「発話行為」(A<Gesprächsakt、仏語A<acte de langage):発話の分割可能な最小単位(Moeschler 1994:74参照)。

ところでこの単位設定には “GA” と “GZ” の境界線を引く基準が明確に根拠づけられていないように思える。その結果GZとGA両者の単位設定に曖昧さが感じられる。加えて発話単位は本来3)=“E”, 4)=“I”, 5)=“A” のようにフランス語の略語で表記されている。そのため最大単位の「段落」は “I” と表記され、また4番目のGesprächszugも “I” となり、同じ表記になってしまう。本研究ではこのような紛らわしさを回避するため、便宜的に下位の3単位を“GA”, “GZ”, “A” とドイツ語の略語表記に変えて、単位と記号表記の間に有契性が出るようにする。但し3)と5)の単位はこの方法では “GA” と重複するので、3)は “GA”, 5)は単に “A” の略語を用いて区別する。

ジュネーブ・モデルでは「階層的・機能的分析」が中心的な機能を果たす。ここで言う「階層的分析」とは「発話交換」(GA)、「発話列」(GZ)、「発話行為」(A)等の発話はそれぞれ独自の機能から上下の階層関係で結びついているという前提で分析を進める手法である。他方「機能的分析」とは「発語内行為的機能」と「相互行為的機能」という原理を設定して、最初の発話列に「主導的機能」を割り当て、これに応じる次の「発話列」には「対応的機能」と相手から対応を引き出す「主導的機能」も認め、三番目の「発話列」はその後の会話を「終了させる機能」を付与する方法論である。

なお相互行為で主導的構成素に対応する発話を生成する際、連結義務の充足が必要条件になる。この適格性を検分するために、このモデルでは生成された発話を以下の4種類の基準条件に照らし合わせて整合性を試験する。

話題性条件(TB < die thematische Bedingung):主導的構成素に応対する構成素はこれと同一の話題に関連していなければならない。

命題性条件(BPG < die Bedingung des propositionalen Gehalts):主導的発話に応対する発話はこれと反意、含意または言い換え等の意味論的関係を保持する義務がある。

発語内行為的条件(IB < die illokutionäre Bedingung):主導的構成素に応対する発話の発語内的行為のタイプを規定する。すなわち発話者が遂行しようとする意図がその発話に明確に表現されているか否かをチェックする。

論証方向性条件(BAO < die Bedingung der argumentativen Orientierung):主導的構成

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ127

素に応対する構成素はこれと同一の論証に関わる方向性を持たなければならない。

これら義務条件を充足させる度合いは各構成素間の連関性と結束構造の度合いの強さを規定する。発話の分析はこれらの条件を基準にして、脈絡、対象となる発話に応対する構成素の統語論的・語用論的機能を斟酌しつつ進める。なおこれら条件の表記は、このモデルではフランス語の略語形が用いられている。しかし本稿では意味の関連性に少しでも有契性が出るようドイツ語の短縮形TB, BPG, IB, BAOに切り換える。

なお上の4条件に加えて、同一話者の長い発話連鎖（モノローク）内部の各シークエンスの適格性を試験するために別枠で3種類の義務条件を設定している。

「話題性条件」（TB < die thematische Bedingung）：「発話列」の最初の構成素で導入された主題に発話列の話題内容を合わせる義務。

「論証関係性条件」（BAB < Bedingung der argumentativen Beziehung）：「発話列」の最初の構成素に対して適切な論証関係を作り出す構成素に接続させる義務。

「論証方向性条件」（BAO < Bedingung der argumentativen Orientierung）：「発話列」の最初の構成素の論証方向性に矛盾しない構成素に接続させる義務。

（Moeschler 1994: 69-84参照）

3．言語資料

本研究の言語資料は2002年2月～2004年2月にかけてベルリン、ミュンヘン、ハイルブロン近郊にあるGymnasium（中・高等学校）、Grundschule（小学校）および Sonderschule（特殊学校）の教員と社会福祉関係の施設に勤務する社会福祉士や臨床心理士などを対象にした計30回余のインタビューが基盤になっている。2002年2月～4月のインタビューは日本語母語話者（男性）1名により取材が行われた。この期間の取材では、組織の代表者5人が列席したインタビューが3回、2人が4回あった。この人数は組織側で選定してきたものである。これ以外の取材は、各組織につき1人の代表者が応じている。取材された対話はすべてミニデイスク（MD）により収録されている。取材時間は20～80分と機関により異なった。2003年8月～2004年2月にかけてはドイツ語母語話者（女性）がこのプロジェクトに加わり、2名がIRとして個別にドイツ語母語話者に取材を行った。この期間の取材ではIEは1名で、会見時間が15分程度になるように調整された。これは談話内容を比較しやすくするためである。この内ドイツ語母語話者が行ったインタビューが6回になり、日本語母語話者は9回行っている。これらの会見はすべて了承を得てビデオに収録されている。

取材内容については、教員へのインタビューでは学校の組織・運営に関わる問題、教育の重点、生徒と学校が抱えている問題など約10項目から成る共通の質問をした。また福祉関係の専門家に対しても、各組織の経営母体と運営の仕方、介護保険の運営上の問題点、業務の内容と問題点、当事者との係りあい、改善すべき問題点など共通の質問を準備して取材を行った。な

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ128

お電話で取材を申し込む際、相手には組織に関わること、業務に関する質問をしたい旨を説明する程度に留め、内容に関してはそれ以上は何も説明しなかった。

以下で分析に用いる対話は2003年9月1日にベルリンの私立中・高等学校（Gymnasium）の校長（Direktor）であるドイツ語母語話者に日本語母語話者が行った15分程のインタビューの一部である。Dはインタビューに応じた校長先生（=IE)、Nは日本語母語話者（=IR）を指す。またD18, N19の数字は取材開始から数えて18番目、19番目に発話された構成素を意味する。

4．対話の分析と階層構造

談話の解釈と分析に際しては共同研究者であるドイツ語母語話者とビデオ録画ををもとに数度にわたり検討を行った。さらにここでまとめられた分析結果に関して、社会言語学者のJ. Schwitalla教授とビデオ録画をもとに意見の交換を行うことができた。

インタビューは、最初にIRが相手の名前をHerr Dr. D! と呼びかけ、取材の機会を与えてくれたことに謝辞を述べてから開始された。下で分析の対象にするN21は会見開始から6〜7分の時点で出された「この学校では教育の面で何に、より多く重点を置いているか、知識の伝達か、それとも思考力の養成か」という質問である。DはNが質問をしている際、一つのシークエンスないしは一統語単位が発話される毎に頷く動作をして「聞き手のシグナル」を発信している。ただja, jaという発話は行われなかった。

＜会話文字化に用いた記号＞

?	上昇イントネーション	,	中くらいの上昇イントネーション
-	上下のないイントネーション	;	大幅に下降するイントネーション
(.)	ごく短いポーズ	(-) (--) (---)	短い、中くらい、長いポーズ
(2)	2秒続くポーズ（１秒以上のポーズ）	{笑い}	「笑い」など非言語的行動
(eben)	不明確な発音から推測された語句	(…)	理解不能な発音
NUR	主要（第一）アクセント	nUr	副次（第二）アクセント
:, ::, :::	長さに応じた長音	[( ])	発話重複の開始（終わり）

（Selting u.a. 1998 u. Schwitalla 2003: 11f.、ザトラウスキー1993: 60参照）.

N21 : Ah: was wird hier allgemein, also worauf wird hier mehr Gewicht gelegt, auf Kenntnisvermittlung oder (..) auf Denkvermögen? Ii +TB –BPG +IB +BAO

D22 : mhm (3) {顔を3〜4秒間横に向けながら} Das ist ne sehr schwere Frage.

23 : Ja, (2) die, der Kern der Frage ist, wenn ich Sie richtig verstehe, ja, (2)

24 : äh, wir können es vereinfachen : Was wollen wir bei den Schülern bewirken?

25 : Oder anders gesagt : WA: s für Menschen wollen wir am Ende aus der Schule entlassen? Ir +TB +BPG +IB +BAO

N21はこの学校の教育理念に関わる質問である。Iiは「主導的シークエンス」を意味し、相

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ129

手に返答を促す機能があることを示す。質問の内容から話題性条件は本筋のテーマと合致しており、これを充足しているので+TBという分析結果になる。しかしこの質問の表現は統合論的、意味論的整合性の点で明確さに多少問題があるように見える。このことは次の対応構成素のD23で「質問の核心は、あなたの質問を正しく理解していれば」と真意を確認する発話がなされている点からも確認できる。これで命題内容性条件は充分に充たされていないと判断して－BPGという結果を出す。他方、発語内行為的条件は「知識の伝達」あるいは「思考力の養成」か、いずれかを問う二者択一の統語構造を成している。またDもすぐそれと理解して「これは難しい問題です」（D22）と応対している点からも証明できる。そこでこの条件は充たされていると判断でき、+IBという結果を出す。さらにN21の論証方向性条件に関しても、もう少し補足説明が必要であるかに見えるが、しかしD23に示された反応から質問の趣旨は正しく伝わっていると解釈できる。したがってこの条件を充たしていると判定して+BAOと分析する。

N21の質問に対してDは、D22で顔を横に3～4秒向けて考える動作をしている。この動作は、意表を突かれた質問をされた際、戸惑いを隠したり、自らの態勢を立て直す際に見られる。これは当人は後に確信に満ちたような話し方をしても、事実に即して必ずしもそうではないことを聞き手に推察させる意味作用を持つ非言語行動と見なせそうである。同じ反応は、同様の質問をこの学校の女性と男性の計5人の教員にした際、4人が見せている。なおDはここで質問の内容をNに正面から問い質すことはせずに、23で「この質問を簡潔にすることができる」と自分で進めつつある思考のプロセスを言語記号化して独自の質問に置き換える行動に出ている。すなわち24の後半でまず「教員は生徒にどのような影響力を及ぼそうとしているか」と、異なる内容の質問に表現し直した上で、さらに25で「われわれは最終的にどのような人間に生徒を教育してこの学校から卒業させたいのか」と、もう一度、質問を練り直す対応をしている。

以上の分析からD22～25はN21に応対した発話連鎖と位置づけられる。したがってこれら連鎖全体は対応構成素になるのでIrと表記する。またD23はwenn ich Sie richtig verstehe と質問の意味を確認する発話であり、N21の主導的構成素の話題の枠内に納まっている。そのため話題性条件は+TBとなる。同様に命題性条件も主導的構成素である質問のパラフレーズと解釈でき、意味論的関係が認められる。そこで命題性条件も発語内行為的条件も満足させているので、+BPG、+IBという分析結果が出せる。なお論証方向性条件については、N21の質問に直接的に答える内容になっていない。しかしこのシークエンスはIRの質問を再表現する作業と見なせ、回答を表明する一行程と解釈できる。そこでこの条件も充たしていると判定して+BAOの結果を出す。

D26 : Wollen wir …

N27 : [ah:: mhm]

D28 : [Menschen entlassen, <両手を縦に広げて顔の両端の左右にかざして>die Wissen gespeichert haben, möglichst viel, oder wollen wir Menschen entlassen,

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ130

N29 : [ja]

D30 : die HAL-

Tungen, FERTIGkeiten, EINSTELLungen gelernt haben? +TB +BAB +BAO

N31 : [Ja (…)]

続くD26、28, 30はD23～24でDが自ら表現し直した質問をさらに「生徒に可能な限り多く知識を詰め込んでこの学校を卒業させるか、あるいは姿勢、技能、考え方を習得した人間を卒業させるか」と二項対立を成す疑問文でN21の質問に答える具体的な回答を示唆した。なおNはここでD26の発話と同時に相槌を打ったように見える（N27）。しかしこの聞き手のシグナル発信はタイミングの適切さに多少の問題が感じられる。ともあれDはこれに影響されずに最初の質問をD28とD30で三度にわたって表現し直したと分析できる。

ところで脳裏に浮かぶ思考の流れを言語記号化して相手に伝える行動は、ドイツ語母語話者に共有された思考様式の一端が現れたと見なせそうである。ちなみにここで「知識をできるだけたくさん詰め込んだ人間を」と言いながら行った両手を顔の両端に広げる仕草（D28）は「目的に直進する視野の狭さ」を示唆した動作と理解できる。なおこの段階では教育方針として何を優先的に重視しているか、肝心の回答はまだ表明されていない。N31のJaはDがgelerntと言い始めたところで、Nが聞き手のシグナルを発したと推定できる。Nはその後に何かを口にしているが、その発言内容は明確に聞き取れない。

以上の発話交換ではD26, 28, 30はNの聞き手のシグナルが発信されてはいるが、統語論的視点から23から続くモノローグと見なすことができる。そのためこの発話連鎖には、同一人のモノローク内部の発話の適格性を試験する義務条件を適用する必要がある。

D26, 28, 30の発話連鎖は意味論的には引き続き同じ話題を論じた内容である。そこで話題性条件に関しては＋TBと評価する。次に論証関係性条件に関しては、D26, 28, 30は最初の構成素D22～25の質問の表現の転換を済ませ、自ら設定し直した質問に関する回答を引き出す過程の発話として機能している。そこでこれらの発話シークエンスは最初の構成素に対して論証関係を作り出していると見なせる。そのため +BABという判定を下す。最後に論証方向性条件については、これらモノロークの発話連鎖はDが独自に二者択一の形に表現し直した設問に関する後半の回答に該当する。ここからD26, 28, 30は、Dが独自に設定し直した質問（D24, 25）に関して、その回答をpro und contra（「賛成―反対」）の二者択一の形式で示した発話であると読み取れる。したがってこれらは論証の方向性を保持しており、整合性が取れていると解釈できるので、+BAOと判断する。

DはN31のjaという合いの手が入ったのを耳にしながら、さらにgelernt haben?と発話を続ける意図を上昇イントネーションにより告げて、短いポーズを入れた後に話し続けている。D26～N31の発話は聞き手の関心を示す相槌（N31）が入っている。しかし全体としては統語論的にDのモノローグと取り扱うのが妥当と考える。

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ131

D32 : (--) und da
würden die Jesuiten sagen und sage ich, uns ist es wichtiger, dass die Schüler HALTungen gelernt haben, z. B. Haltung, als Christ (2) (imEn) im Leben für andere da zu
N33 : [ja:]
D34 : sein, später. +TB +BAB +BAO

さてD32で初めて理想とする教育目標が示された。ここでda würden die Jesuiten sagenとイエズス会を主語にして、定形を接続法Ⅱ式にした意図は、「イエズス会に理想とする教育方針を尋ねたとすれば～と答えるだろう」と、これから述べる回答は運営母体のイエズス会の理念であり、また教員である自分の見解とも全く一致していること表明する意図があるものと解釈できる。なおこのシークエンスの終わりの方の（imEn）は意味が明確に判断できない発話を示す。

ところでN21は「知識の伝達か、思考力の養成か」という質問であった。しかしそれに対してDは「(生徒が）将来、キリスト教徒として他者のために尽くす姿勢、技能、態度を学ぶことが重要」という教育理念を表明した。これは本来の質問から期待できる回答とはかなりかけ離れた内容と言える。この点この対応については、Nが初めに質問をした時点（N21）で、想定できる回答がこの学校の教育理念として妥当であるかを問題にせず、自らの理想とする目標を披瀝するために、N21の質問を三度にわたり独自に設定し直すストラテジーを用いたと解釈できる。すなわちこの一連の行動はIEであるDが “negative politeness” を行使したものと分析できそうである。

以上の観点からD32, 34はN21の主導的話題に直接答える見解表明の機能を果たしたシークエンスと捉えられる。その結果、話題性、論証関係性、論証方向性に関する条件はすべて充足されていると判断して、+TB、+BAB、+BAOという分析結果を出す。

D35 : Also, das, was ich gelernt habe, nicht für mich zu behalten und für mich zu nutzen, um später möglichst viel Geld zu verdienen,
N36 : [ah: ja]
D37: sondern dazu zu nutzen,
N38 : [ah]
D39 : um anderen zu helfen, in welchen Formen auch immer, z. B. in einer ehrenamtlichen Arbeit, in der Kirche, im Verein, in der Partei, also äh Menschen für andere.

D35の初めのalsoは、それ迄に示した回答をさらに説明することを予告する接続詞の機能を担っている。ここからD35のシークエンスはD31～34で提示された回答の論証に該当する発話と位置づけられる。その論証の仕方は本来の質問を「賛成―反対」の二項対立の枠組に変換し

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ132

た質問に対応する形式になっている。すなわち教育の重点は「学校で学んだことを、将来お金をたくさん稼ぐために利用するのでなく」と初めに「反対」に相当する回答を挙げ、後に「賛成」に該当する「どのような形であっても他の人間の助けになるように学んだことを利用する」ことが重要である、と本来の回答を提示した。その上で「どのような形であっても」と述べた認容句に関して「例えば名誉職についてであれ」「教会の中であれ」「協会の中であれ」……と論拠をさらに4つの具体例を挙げて規定している。その上で最後にもう一度alsoを使って「つまり他の人のためになる人間」の育成が重要な目標であると総括をした。

ところでD32, 34でN21の質問に対するイエズス会の重視する教育理念が回答された。この部分は一つの命題と置き換えることができる。その前提に立つとD35, 37, 39の発話はこの命題に対する論拠を提示したものと位置づけられる。となるとこれは初めに結論を述べ、後に論証を行う “deductive pattern” に該当すると思われる。なおこのように自分の考えを誤解が生じないように十二分に説明する言語行為は個人主義が支配的な社会の相互行為の基本的姿勢であると見なせよう（ホーフステード1996: 58参照）。

この間、Nは2回、相槌のシグナルを発している。1度目はD35で “verdienen” が発話されている最中である。これは相手の先行する発話の継続を促す機能（ザトラウスキー1993: 65参照）を担うと考えられる。2度目はD37 の “nutzen” が発話されている最中である。これは相手の発話が理解できることを告げる相槌（Schwitalla1979: ザトラウスキー1993: 65参照）であると理解できる。いずれにせよこれら聞き手のシグナルは、日本語の母語干渉がドイツ語を話している際に現れた現象と見なせそうである。他方、ドイツ語母語者の間では黙って相手が話し終わるまで相手に視線を向けたまま聞くタイプが一般的な対応と言える（Bouchara 2003: 125 u.130参照）。加えてここの例に見られるように、言葉は発せずに発話の節目毎に頭で頷くスタイルもよく観察できる。

D35〜39の発話は32語と長い連鎖になっている。しかし統語論的、意味論的にはやはり同一話者によるモノローグの連続体と把えるべきであろう（N38を除く）。その枠内でまず話題性条件に関しては主導的発話であるN21の質問に直接答える発話連鎖であるので+TBと判定する。次に論証関係性条件は、D26で述べた教育理念の具体的な根拠付けの役割を果たしており、これは論証関係を作り出す構成素に接続させる義務条件を充たしている。そこで論証関係性条件は+BABとなる。また論証方向性条件としても、D26の構成素と同一方向の論証関係を作り出す発話単位に接続させている。加えて具体的な例を4点挙げた上で最後に“also Menschen für andere”と総括しており、論証関係を充たしていると理解できる。そのため+BAOの評価が妥当になる。

D35, 37およびD39の発話連鎖により主導的構成素であるN21に対する回答はなされた。しかしDはこの後も発話を続けている。

D40 : Das ist eines der Erziehungsziele von Jesuiten an ihren Schulen, die, [die]

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ133

N41 : [aha:]

D42 : Kinder

sollen zu Menschen heranreifen für [andere] +TB +BPG +IB +BAO

D40は「これがイエズス会の教育目標の一つである。子供たちは人間になるように成熟させる」と、ここでもう一度、総括を行っている。D が “Schulen, die, die” と話している中をNは「同意のサイン」（“agreement”：ザトラウスキー1993: 65参照）を発信したものと解釈できる。Dはこれを耳にしながら発話を続けて、その後「他の人のために尽くせるような人間に」とその「人間」の概念を具体的に規定している。

D40とD42はやはりD35, 37, 39からのモノロークの連鎖を形成していると把握できる。これらは上で述べた回答を再度、表現し直した発話である。つまりこれらは同じ話題の継続であり、上で提示した命題をまた表現し直したものと解釈できる。そのため話題性条件、論証関係性、最後に論証方向性条件に関しても「他の人のために尽くす人間を育成する」は回答を根拠づける点で一貫した方向性を示している。そこで+TB、+BPG, +IB , +BAOの解釈が妥当と判断できる。

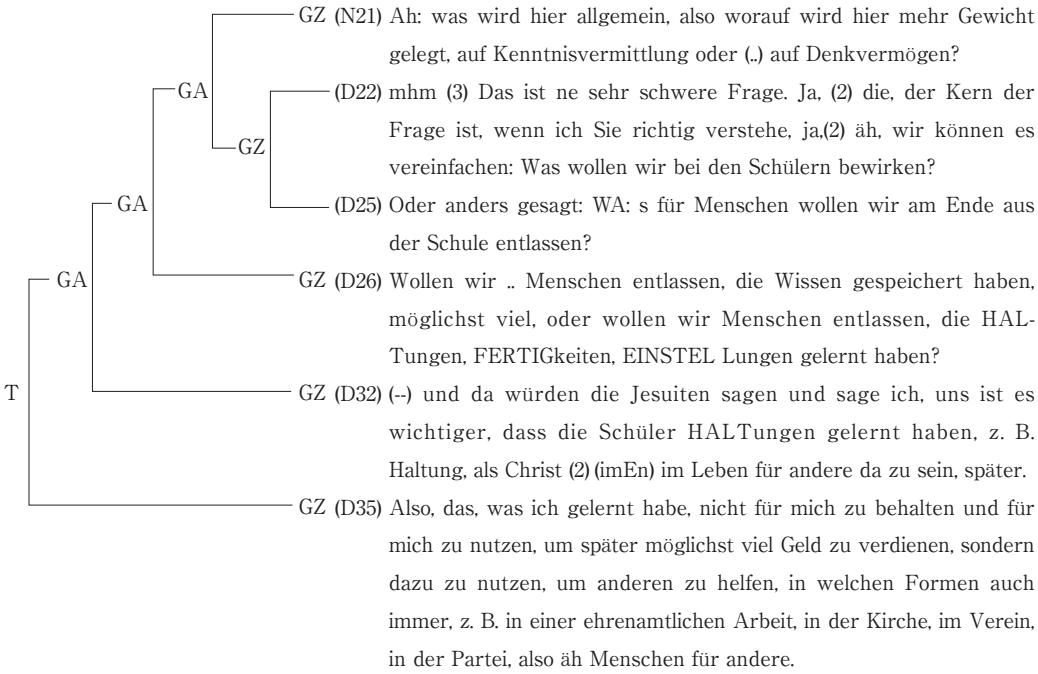
以上N21～D42迄の発話交換はN21を主導的構成素とする形で展開された一つの単位「節」（“T”）を形成している。すなわちD22はN21を主導的構成素とする対応構成素である。ここでN21の質問に対し2回目の表現の変換が行われた。これに続くD23, 24の発話は統語論的、意味論的観点からD22に連続するモノロークとして表記してある。D25 はD22で表現し直した質問を再表現した発話と位置づけられる。そのためD25 はD22と同じ階位の発話と解釈でき、同一の階層に配列される。その後26 でDは上で二度にわたり表現し直した質問に対する回答を「賛成―反対」の形で提示した。これは25に主導された発話と見なせる。そのためD25の下の階位に設定する。そしてこの表現し直した質問に対する回答が最終的にD32で表明された。そのためD32は26の下の階位に位置する。このように各発話シークエンスをそれら独自の機能から分析し、この作業を繰り返すことによりN21を頂点とした以下の階層構造が得られる。GAは「発話交換」という構成単位を示す。

ところでこのインタビューに表れる相互行為全体が “foreigner talk”（フェアブラザー 2004: 56-63参照）に分類すべきではないかという問題提起も想定し得る。しかしこの点に関しては、N（=IR）の発話を統語論、意味論、語用論の視点から吟味しても殆ど逸脱が見られないこと、またこのことは母語話者であるD（=IE）の応対からも実証されていると判断できよう。*

＊この点に関しては社会言語学者のJ. Schwitalla教授とも意見の交換を行った際、教授はかかる相互行為はドイツ語母語話者どうしの間でも十分起こり得るという見解を表明された。

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ134

談話の階層構造



T: 節　GA: 発話交換　GZ: 発話列

5．結　び

思考様式の枠組みとしてドイツ語母語話者（=IE）が質問を受けて回答する際、その質問をIEが独自に表現し直すために、脳裡で考えをまとめるプロセスを言語表現して相手に開示する思考の進め方が具体的に確認できた。またその際、提示された質問を「賛成―反対」の二項対立の形式に設定し直す対応はドイツの社会で一般的に見られる思考様式の一つと言えるのではないか。これに関連して初めに結論を述べ、その後に誤解が生じる余地を残さないよう幾重にも具体的な根拠づけを行う「演繹的様式」（“deductive pattern”）が確認できたと考える。

「丁寧な言葉使い」（“linguistic politeness”）に関しては、日本語母語話者（=IR）から向けられた質問に対してIE はその適否を問題にする言語行動に出る代わりに、三度にわたり独自に質問を設定し直す作業を行っている。この一連の行動は自ら標榜する教育理念を披露するために取った “negative politeness” のストラテジーを行使したと解釈できそうである。他方でIRは、IE が発話を続けるために顔を横に向けたり、発話を続けている最中にも拘らず何度か割り込もうとしている。この対応はIEから見れば「話者交替」のルール違反であり、「丁寧さ」を欠いた行動と判断される可能性がある。「話者交替」に関連して、発話の継続を促がしたり、発話内容への関与を示す機能を持つ「聞き手のシグナル」としての「相槌」がIE、IRの双方に度々観察できた。さらにここではIEがIRの発話の節目ごとに頷くスタイルも幾度か確認できた。

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ135

なおNの聞き手のシグナル発信は、日本語のフイードバックの習慣が母語干渉になってドイツ語の運用面に持ち込まれたものと見なせる対応が何度か見られた。

非言語メッセージに関しては、一連のインタビューでドイツ語母語話者に、言語記号によるメッセージと組み合わせた顔の表情および両手や手の平などを用いた動作が頻繁に確認できた。特に難しい質問をされて思案をめぐらす際、3〜4秒間、顔を横に向ける仕草が特定できた。さらに両手を縦に広げて顔の両側に立てて「目的に直進する視野の狭いタイプ」を示唆する非言語メッセージも特定でき、これら非言語行動は言語記号による達意に劣らない意味伝達機能を果たしていると考えられる。

文献

Bergmann, J.R. (1994): Ethnomethodologische Konversationsanalyse. In:Fritz, G./Hundsnurscher, F. (Hrsg.): Handbuch der Dialoganalyse. Tübingen, 3-16.

Bouchara, Abdelaziz (2002): Höflichkeitsformen in der Interaktion zwischen Deutschen und Arabern, Reihe Germanistische Linguistik; 235, Tübingen.

Brown, P./Levinson, C.S. (1987 [1978]): Politeness. Some universals in language usage. Cambridge Univ. Press.

フェアブラザー、L. (2004)「接触場面の言語管理研究」、千葉大学大学院社会文化研究科研究プロジェクト報告書、第104集、55-67.

Garfinkel, H./Sacks, H. (1970): On formal structures of practical actions. In: McKinney, J. C./Tiryakin, E. A.(ed.): Theoretical sociology. Perspective and developments. New York, 337-366.

Goodenough, W. H. (1964): Cultural Anthropology and Linguistics. In: Heymes, D. H. (Hg.): Language in Culture and Society, A Reader in Linguistics and Anthropolgy, New York etc. Harper & Row, 36-39.

Heritage, J. (1984a): Garfinkel and Ethnomethodology. Cambridge.

– (1998): Conversation Analysis and Institutional Talk. In:Čmerjrková, S. et al. (Hrsg.): Dialoganalyse VI. Teil 2. Tübingen.

Hinnenkamp, V. (1998): Missverständnisse in Gesprächen. Opladen/Wiesbaden.

ホーフステード、G.(1995)『多文化世界』、岩井紀子・岩井八郎訳、有斐閣

Hundsnurscher, F. (1980): Konversationsanalyse versus Dialoggrammatik. In: Rupp, H./Roloff, H. -G. (Hrsg.): Akten des 6. Internation. Germanisten-Kongresses, Basel 1980. Bd.2, Tübingen, 35-46.

Ide, S. et al. (1992): The concept of politeness. In: Watts, R. J. et al. (ed.): Politeness in Language, Berlin/New York.

立教コミュ05 05.3.18 10:56 AM ページ136

Kohrt, M. (1986): Dialoggrammatik und/oder Konversationsanalyse? In: Hundsnurscher, F./Weigand, E. (Hrsg.): Dialoganalyse. Ling. Arbeiten 176. Tübingen, 69-82.

Kühn, Christine (2002): Körper – Sprache, Elemente einer sprachwissenschaftlichen Explikation non-verbaler Kommunikation, Frankfurt a. M.

Lieb, H.-H. (1996): The Semantics of German *und*. In: Travaux du Cercle Linguistique de Prague, NS 2, Amsterdam/Philadelphia, 157-176.

Lörscher, W./Schulze, R. (1994): Die britische Diskursanalyse. In: Fritz, G./Hundsnurscher, F. (Hrsg.): Handbuch der Dialoganalyse, Tübingen, 51-68.

メイナード、S. K. (1998 [1993])「会話分析」、東京

宮内敬太郎 (1999)「Sozialisation 言語　思考様式」、立教大学言語人文紀要「ことばと人間」1999 vol.1, 5-28.

Moeschler, J. (1994): Das Genfer Modell der Gesprächsanalyse. In: Fritz, G./Hundsnurscher, F. (Hrsg.): Handbuch der Dialoganalyse. Tübingen, 69-94.

Ochs, E. (1979a): Planned and unplanned discourse. In: Talmy Givón (ed.), Syntax and semantics, Vol. 12, 51-80, New York:Academic Press.

Schank, G./Schoenthal, G. (1976): Gesprochene Sprache. Eine Einf. in Forschungsansätze u. ... Tübingen.

Schwitalla, J. (1979): Dialogsteuerung in Interviews, Ansätze zu einer Theorie der Dialogsteuerung mit empirischen Untersuchungen von Politiker-, Experten- und Starinterviews in Rundfunk und Fernsehen (Heutiges Deutsch I/15), München.

-- (1994): Gesprochene Sprache – dialogisch gesehen. In: Fritz, G./Hundsnurscher, F. (Hrsg.): Handbuch der Dialoganalyse. Tübingen, 17-36.

Scollon, R./Scollon, W.S. (1992): Intercultural Communication. Massachusetts, USA /Oxford OX 41JF. UK.

Watts, R.J. et al. (ed.) (1992): Politeness in Language. Berlin/New York. In: Winter, W. (ed.): Trends in Linguistics. Studies and Monographs 59.

Westheide, H. (1989): Kontrastive Dialoganalyse. Die Beschreibung stilistischer Werte von Redemitteln im Niederländischen und im Deutschen. In: Weigand, E./Hundsnurscher, F. (Hrsg.): Dialoganalyse II. Bd. 2, 311-321.

山口和代 (2002)「ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知」、社会言語科学、第5巻第1号　2002年9月、75-84.